

2013 年度 FOS 奨学生

東北大学工学部機械知能航空工学科 平成 25 年卒業

中村拓磨

Georgia Institute of Technology

Department of Aerospace Engineering

米国留学に至るまで

僕が少しでもアメリカ留学を志したのはいつだろう、と振り返る。定かではないがおおよそ 14 歳ぐらいだ。このころの僕がどんな子供だったかというと

宇宙が好きだ！

空を飛ぶものが好きだ！

ロボットが好きだ！

といった感じであった。工作キットなどを買ってもらっては、組み立てて遊び、興味から相対性理論や回路入門などを読んでいた。鳥人間コンテストや高専ロボコンはお気に入りの番組だった。

こんな感じの子供が「将来何をやりたいか？」と考えたとき、最初にでてきたのが NASA だった。田舎の無知な中学生にとっては、宇宙=NASA、宇宙の仕事は全て NASA がやっていると思っていた。NASA に行けば宇宙船やガンダムが作れると思った。友達と将来の話をしていて、「NASA で働きたいな」と言った日から、僕は NASA で働くことを目指し始める。

中学生ながらにネットや本で調べていると、どうも NASA に行くためには大学を卒業していなければならないようだ、ということに気付く。そこで僕は大学に行こうと決心し、どこの大学へ行けばいいのかを調べる。NASA というのだからいい大学でないといけないのだろう、東大などだろうか？と思い、理系のレベルの高い大学とはどんなところかと調べていた。

すると衝撃の事実を知る。世界ランク上位校がほぼアメリカ独占状態なのだ。ハーバードやマサチューセッツなどとよく分からないが聞き慣れた大学が並んでいた。そこで僕は、アメリカの大学はとてもレベルが高いのだろう、と思い、アメリカの大学へ行くことを一つの目標とした。

少し時間が経つ。なんとなくアメリカの大学へ行きたいな、と頭によぎらせながら僕は高校生になった。高校生前半の頃、具体的にいつとは覚えていないが、再び僕は衝撃の事実を知る。

アメリカの大学の学費が異常に高いのだ。

年間 300 万円、400 万円が普通。非常に高い大学は 600 万を越えてくる。

下のリンクは、アメリカの工学部のトップスクールの情報がまとめてあるサイトだが、州立大でさえも年間 300 万近くの費用がかかるのが分かる。私立大で言えば、スタンフォード大学などは\$43,950 とあるので、1 ドル 100 円で計算すると約 440 万円/年だ。

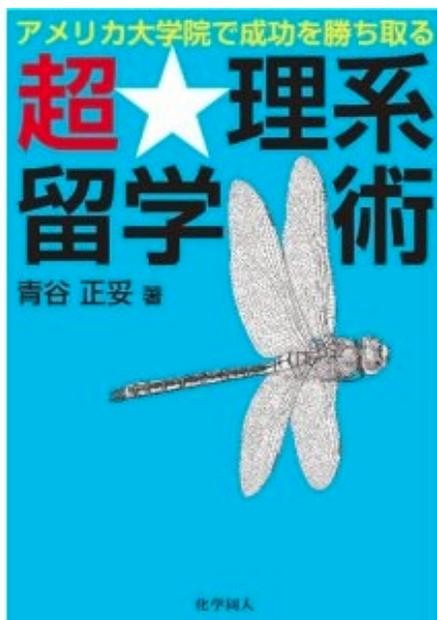
US News Best Engineering Schools

<http://grad-schools.usnews.rankingsandreviews.com/best-graduate-schools/top-engineering-schools/eng-rankings>

「お金がかかりすぎて留学できない」

田舎の平凡な家庭に生まれた僕は、心のどこかで留学を諦めた。なるほどアメリカ人は金持ちだな、とか考えていたような気もする。

ところが、その数ヶ月後ぐらいに 1 冊の本に出会う。「超理系留学术」という本だった。



アメリカの大学院生は給料をもらって生活している。授業料を払っていない。日本人にも十分にチャンスがある、などと言ったことが書いてあった。学費が高過ぎて無理だと諦めたアメリカ留学だったが、大学院留学はとても現実的に見えた。僕はこの本を読んだ後から大学院でアメリカに留学することを目指し始めた。

そこから僕は大学受験を経て東北大に入り、1年生のころから人力飛行機製作サークルに所属し飛行機的设计、製作を行った。1年生の春休みにアメリカにホームステイし、2年生の夏にスイスへの海外研修に参加。3年生の夏から1年間交換留学に行き、その直後ドイツで3ヶ月間のサマースクールを取った。2011年の鳥人間コンテストでパイロットを勤め優勝。アメリカで自家用飛行機のライセンスを取得。STeLAと呼ばれる国際リーダーシップフォーラムにも参加した。

ただ無我夢中だった。気がつけば大学4年生の秋を迎え、僕はアメリカの大学院を受験した。

入学当初から積極的に留学プログラムに参加していたこと、英語の勉強をしていたこと。飛行機的设计、製作、操縦、航空法を深いレベルで理解していること。幅広い角度から専門分野の知識と経験を蓄えて来ていたこと。留学に対して情熱があること、既に何か国もの留学経験があること。このような激動の学部生時代と、航空宇宙の仕事がしたいという情熱をただエッセーに書き綴った。そして僕は多くのトップスクールから合格ももらった。

これが、僕がアメリカ留学に至るまでの話である。

もしあなたが、何らかの理由でアメリカ留学を目指すなら、合格を勝ち取る為の受験テクニックや、小手先の戦術に時間やお金を費やす必要はないと思う。僕が、空や宇宙に惚れてアメリカを目指したように、あなたにも留学を志した根幹があるはずだと思う。そこに向かって全力で努力すればいい。アメリカの大学院入試はきっとそれを評価してくれる。

最後に、僕のそんながむしゃらな情熱を評価して下さい、非常に手厚い経済支援をして下さる船井情報科学振興財団様に感謝を伝え、僕の留学に至るまでの報告書とさせていただきます。

2013年7月3日

中村拓磨